

## 国際ラッカセイ会議に参加して

田島亮介<sup>1</sup>・塚本葉子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>東京大学大学院農学生命科学研究科・<sup>2</sup>東京大学農学部

### はじめに

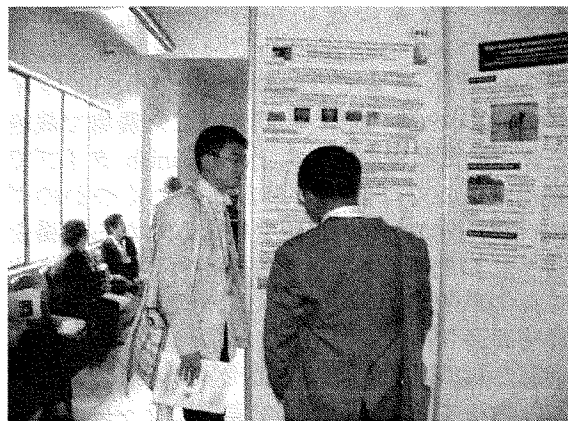
私たちは2004年度根研究会「苜蓿」海外渡航支援を受けて国際ラッカセイ会議に参加をしました。国際ラッカセイ会議は2005年1月9日から1月13日にタイ王国、バンコクの Kasetsart 大学で行われました。昨年12月26日にインドネシアスマトラ沖で地震があり、タイ南部も津波のために大きな被害を受けましたが、バンコクは被害がなく学会は予定通り行われました。Kasetsart 大学はバンコクの中心から少し離れて位置し、広大なキャンパスを持つ総合大学です。Kasetsart 大学内にラッカセイに関する研究を行っている Peanut SATT Center (Southeast Asian Technology Transfer Center for Production and Utilization of Peanuts)が設置されており、今回のラッカセイ会議はその機関が中心となって開催されました。ラッカセイを対象とする多種多様な分野の研究者約150人が世界各国から集まり、発表と意見交換が行われました。参加者はタイとアメリカの研究者が多く、日本人は私たちを含めて4人でした。私たちは今回が初めての参加でした。

### 発 表

発表は口頭発表がすべて招待講演で9題であり、これはラッカセイの利用状況やアレルギーの問題から、栽培や遺伝子研究まで様々なものがありました。ラッカセイは栄養の豊富な作物ですが、高カロリーであることや、アレルゲンを含んでいることなどが利用面では問題になっています。同時にこの会議において最も大きな問題として扱われていたのは、アフラトキシンでした。アフラトキシンは栽培時に土に潜った莢に感染するカビであり、発ガン性があります。これは感染する時期が栽培期間であるために栽培や育種研究においても問題であり、ラッカセイ研究者全員にとって関心のある事象でした。日本ではアフラトキシンは存在しないために、国内ではそれほど大きな関心を持って研究され

ることがないですが、日本の場合、ラッカセイ消費の多くを輸入に頼っているため、今後重要な問題となり得ると考えられます。また最終日にはラッカセイ研究や栽培のさかんな地域の代表者によるパネルディスカッションがあり、ラッカセイ研究に関しての意見交換をより活発にしていくことを確認しました。

ポスター発表は約80題ありました。このポスター発表では田島が「The Different Patterns of Root System Development and Nodulation in Two Leading Cultivars of Peanut (*Arachis hypogaea* L.) in Japan」、塚本が「The Effects of Phosphorus Deficiency on Growth Angle of 1st-order Lateral Roots in Peanut (*Arachis hypogaea* L.)」と言うタイトルでそれぞれ発表を行いました。ポスター発表は半数以上が私たちの分野に近い栽培や育種に関する発表で興味深いものが多数ありました。ポスターセッションは二回あり、どちらの日もともに活発な議論が行われました。ラッカセイ研究者が集まっているので、ラッカセイについて深い議論ができて大変刺激を受けました。



### スタディツアー

学会三日目はスタディツアーで一日かけて国立の農業博物館(National Agricultural Museum)と Kasetsart 大学の研究農場(Suwan Research Farm)

2005年1月31日受付

\*連絡先 〒188-0002 東京都西東京市練町1-1-1

Fax: 0424-64-4391 E-mail: tazy@fm.a.u-tokyo.ac.jp

見学をしました。農業博物館はバンコクからバスで一時間ほどの郊外にある大きな施設で、現国王の即位 50 周年を記念して 1996 年に創設されたものです。建物の中には、タイの農林水産業に関する多種多様な展示物が、約 200 もの分野にわたり合計九棟の建物に展示されていて、学会で設定されている時間では全てを見学することができませんでした。建物の外にも見学者用に温室や圃場、灌漑設備や森林、漁場などが開放されているということでした。国王そしてタイ全体が農業に対して高い関心を持っているということを感じました。国民の約半数が農業によって生計を立てているタイ王国では、農業に関して抱えている様々な問題を解決できるように、国全体でバックアップする体制作りを目指していました。林業や漁業そして土壌改良や灌漑設備、また農業関連産業や協同組合などへの取り組みについて展示がされており、農業開発に対するこれまでの王室の活動も多く展示されていました。この博物館は、農業の持続的な開発を続けるための具体的な指針やプロジェクトを国内そして国外に示す中心の役割を担っており、あらためてタイ王国が農林水産業に力を入れている国であることを感じました。

続いての見学先である Suwan Research Farm は農業博物館からさらに二時間程度バスで移動したところがありました。この研究農場は主にトウモロコシとソルガムを研究する農場であり、ラッカセイはそれほど多くないようでした。今回は学会のために主に Kasetsart 大学が作出した品種が栽培されていました。ラッカセイは生育特性や着莢の違いから Virginia, Spanish, Valencia, Southeast runner の 4 つのタイプに分けられます。日本では粒の大きな Virginia タイプが好まれています。今回見学した農場で栽培されていた品種のほとんどが Spanish タイプでした。ここでは参加者が自然といくつかのグループに分かれて、意見交換をしながら圃場を回りました。活発な意見交換が行われ、ここまで見学が予定より早く進んでいたのですが、結局時間通りになりました。

私たちの研究ではラッカセイの根系、根粒を取り扱っています。圃場で実際にラッカセイを掘り取ることもでき、根系を観察できました。環境条件や栽培条件もあると思いますが、日本で私たちが栽培している品種より根系が小さい印象を受けました。しかし地上部の生育は良く、また莢もよく着いていました。少し離れた場所には同じく Kasetsart 大学附属のブドウ園がありこちらも見学をしました。ワインなど加工品

を販売していました。



### おわりに

最終日には学会主催のディナーが開催され、バンコクを流れるチャオプラヤ川を船で下りながら参加者同士の交流をしました。非常になごやかな会となり、最後には参加者全員で踊るという大変に一体感のある締めくくりとなりました。全日程を通して、学会運営の方々の丁寧さと温かさを感じ、初めて訪れたタイ王国に非常に好感を持ちました。

ラッカセイ研究者は日本において少なく、今回のようなラッカセイを中心とした大きな学会に参加することは非常に貴重な体験でした。参加にあたって根研究会「苜蓿」海外渡航支援を受けられたことを感謝するとともに、学会で得たものを生かして、今後より良い研究活動を進めていきたいと考えています。

